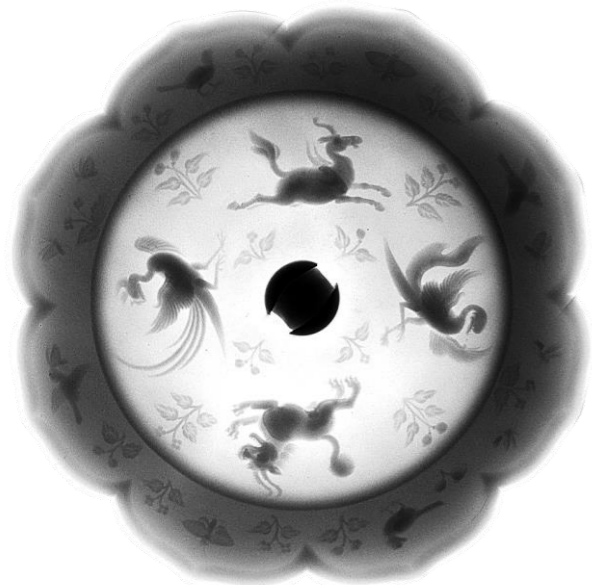


展示品「そうじゅうそうほうもんはちりょうきょう双獣双鳳紋八稜鏡」

唐（8世紀） 径 25.8 cm 重 3,500 g



二匹の獣と二羽の鳥が描かれた八稜鏡です。
半球形の鈕を中心として上下に麒麟と獅子を、左右に鳳凰を配置し、その間に小さい草花を四本描いています。麒麟と獅子は時計回りに走っています。
麒麟は、先端が曲がった太く立派な一本の角を持ち、肩部には細長く尖ったもの（翼？）がひるがえっています。尻尾は反対側の獅子と同じような形態をしており、蹄は馬と同じ奇蹄です。

（X線写真を白黒反転）

また、千石コレクションの鏡の中には、本展展示品のほかにも「麒麟」のような獣がいます。角、尻尾、蹄などを比べてみてください。（企画展「美と微」では展示していません）



本展展示品（No.269／唐）

双獣双鳳紋八稜鏡（No.267／唐）

瑞獣龍鳳紋鏡（No.255／唐）

（参考文献）

出石誠彦「支那の古文献に現はるゝ麒麟について」1930（『支那神話伝説の研究』1933 中央公論社所収）
曾布川 寛「崑崙山と昇仙図」1979 東方学報 51
曾布川 寛「南朝帝陵の石獣と磚畫」1991 東方学報 63
和泉 雅人「麒麟考 東アジアにおける一角獣表象の基礎的研究（一）」藝文研究 vol.81 2001
北 進一「麒麟・その聖なる獣 一起源と図像の変遷をめぐって」桐朋学園芸術短期大学紀要 2009
『世界美術大全集 東洋編 第2巻（秦・漢）』1998 小学館
『世界美術大全集 東洋編 第3巻（三国・南北朝）』2000 小学館
『秦漢遺宝－器物に込めた願い』2009 公財）黒川古文化研究所
『世界陶磁全集 13 遼・元・金』1981 小学館

開催中の企画展

「美と微 -美の集積と技巧の微-」

令和2年9月22日（火・祝）まで

主催 古代鏡展示館（兵庫県立考古博物館加西分館）
加西市豊倉町飯森 1282-1（県立フラワーセンター内）
電話 0790-47-2212
後援 兵庫県 兵庫県教育委員会

令和2年度 夏季スポット展示 解説資料

麒麟が^{きりん}いる鏡

令和2年7月16日（木）～9月22日（火/祝）



麒麟はどこに？

双獣双鳳紋八稜鏡（図録 269）

兵庫県立考古博物館 加西分館
古代鏡展示館
Hyogo Prefectural Museum of Ancient Bronze Mirrors
加西市豊倉町飯森 1282-1（県立フラワーセンター内） 0790-47-2212

中国古代鏡には様々な動物が描かれています。今回スポット展示でご覧いただくのは「麒麟」が描かれた鏡です。麒麟の姿は時代とともに変化しています。今年のNHK大河ドラマのタイトルでもおなじみの「麒麟」ですが、昔の人々は、どのように感じていたのでしょうか？皆さんはどのような姿を思い浮かべますか？

きりん 【麒麟ってなに？】



「麒麟」は、動物園にいる首が長い「キリン」とおなじみですが、全く違う獣で、皆さんご存じの「龍」・「鳳凰」・「四神」などと同じく、古代中国で作られた想像上の動物です。（「実在の動物を指した」という説もあります。）

※首の長い「キリン」は和名。英名は Giraffe、中国名は長頸鹿

◀ 四神：青龍（右） 朱雀（下） 白虎（左） 玄武（上）
四神十二支紋鏡（千石コレクション／当館蔵）より

麒麟 【瑞獣・聖獣としての麒麟】

麒麟は「麟」という名前でも文献に現れます。今から 2500 年前頃（春秋時代）には、貴公子などに譬えられる高貴な獣として認識されていました。その後戦国時代～漢代には吉兆（おめでたいこと）の印とされていました。約 2100 年前（前漢）の書物には「麟、鳳、亀、龍、謂之四靈」と記されており、鳳凰、亀、龍と並ぶ聖獣「四靈」とされていました。

- ※1 『詩経』国風 西周から春秋時代（約 3000 年前～約 2500 年前頃）に及ぶ歌謡 305 編を収録した中国最古の詩集
- ※2 『春秋公羊伝』 春秋時代（約 2800 年前～約 2400 年前）に関する歴史書『春秋』の注釈書。戦国時代末期から前漢初期に作られたと考えられています
- ※3 『管子』（封禪） 戦国時代～漢代に書かれたと思われる書物
- ※4 『礼記』（礼運編） 前漢の宣帝の頃（約 2100 年前）に成立したとされる書物

麒麟 【文字で書かれた麒麟の姿】

麒麟の姿は文献では、次のように記されています。

- 角のある麋（鹿の一種）
- 麟、麒麟は仁獣で、鹿の体と牛の尾、1本の角をもつ。
- 麒麟の角は先端に肉がかぶり、武器ではなく、他の獣に害をなさない仁獣である

また麒麟は「鹿+其」、「鹿+夆」と書くように、鹿に似た獣と考えられていたようですが、馬偏の「騏驎」の文字も見られます。

- ※5 『説文解字』 最古の部首別漢字字典。後漢の許慎が 100 年に作成した。
- ※6 『春秋公羊伝解話』 『春秋』公羊伝の注釈書。後漢の可休（129-192）著
- ※7 江蘇省邳県彭城相繆宇ほくう墓出土画像石 後漢(151年)

【目でみる麒麟の姿】

今から 2000 前頃（前漢末期）より、麒麟の姿は器や石に刻まれ、具体的な姿を見せます。

麒麟は「鹿に似ている」とされるため、姿からは鹿との区別が難しいですが、「丸い角」・「尻尾」などから麒麟と判断できます。また「鹿型」と「馬型」があります。鹿と馬は似ているところもありますが、

- ① 体の鹿の子模様の有無
- ② 蹄の数 馬は 1 つ（奇蹄）、鹿は 2 つ（偶蹄）
- ③ 鬣の有無
- ④ 馬偏の「騏驎」の文字

などから区別することができます。

時代が下ると（約 1600 年前/南朝）、虎や獅子に似た石造の麒麟が現れます。この石像は体長 3m 前後の大きなもので、皇帝の墓を守る鎮墓獣として、皇帝陵の参道に置かれました。

展示品の「双獣双鳳紋八稜鏡」が作られた唐の時代は、「鹿型」「馬型」「獅子型」といった色々な姿の麒麟が作られました。

元は、鹿に似た体をし、先端が肉に覆われた丸い角が 1 本、馬のような蹄であった麒麟ですが、時代が下るにつれて、翼が生える、角が 2 本になる、蹄が二つに分かれる、体の表面を鱗が覆うといった様々な変化をして、今日私たちが思い浮かべるような姿になってきました。



元（約 700 年前）の器に描かれた麒麟

500	400	300	200	100	BCE	CE	100	200	300	400	500	600	700	800	900	1000	1100
春秋	戦国	秦	前漢	新	後漢	呉	蜀	魏	西晋	東晋	五胡十六国	北魏	隋	唐	五代十国	北宋	
麒麟の姿の時代変化表																	
鹿型																	
<p>1 羽紋壺 うもんあん（壺彫り）</p> <p>2 鍍金麒麟 河南省偃師市寇店李家村窖藏出土</p> <p>3 麒麟碑 『石索』巻4 所載</p> <p>4 江蘇省徐州睢寧賈汪地区出土画像石</p> <p>5 江蘇省徐州睢寧泉九女墩画像石（石刻）</p> <p>6 江蘇省邳県彭城相繆宇墓出土画像石（石刻） 卒年：150年、造営：151年</p> <p>7 鳥獸魚文漆絵楯 けん 安徽省馬鞍山市朱然墓（249年）出土</p>																	
馬型																	
<p>8 蕭宏墓左石碑（梁） 卒年：普通7(526)年</p> <p>9 元嘯墓誌側面（石刻） 神龜3年(520)銘</p> <p>10 武帝（宋）初寧陵 左麒麟 卒年：永初3(422)年</p> <p>11 文帝（陳）永寧陵 左・右麒麟 卒年：天康元(566)年</p> <p>12 『營造法式』麒麟（北宋） 1100年奏上</p>																	
獅子型																	
<p>10 宋 422年</p> <p>11 陳 566年</p> <p>12 北宋</p>																	



先端が丸い 1本の角→
翼?→
牛の尾↑
←鹿のような体

【鏡（展示品）に描かれた麒麟】

【時代とともに変わる麒麟の姿】